

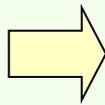
被災地支援ボランティア その1

平成23年8月15日(月) 夜行バスで宮城県気仙沼に向かいました。

夜行バスに乗って、被災地支援に向かいました。被災地での災害の状況やボランティアニーズは日々刻々変化しています。現地でスムーズに活動するためには、現地のルールに従って動く必要があります。いわゆるボランティアバスなどの一定の単位の団体が喜ばれるようです。団体といっても、すべてが流動的で、毎朝まず、現地ボランティアセンターで受け付けることから始まります。



夜行バス



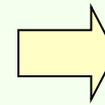
ボランティア
センター

平成23年8月16日(火) 水田の泥水を掻き出しました。

宮城県気仙沼港に面した農家の水田の支援です。津波により流れてきた土砂や壊れた家屋や家具などで埋め尽くされてしまったということです。写真左が朝の活動前の状況、写真右が午後の活動後の状況です。40人が1日活動しても、実は、目に見えた成果はほとんどありません。しかし、写真で比較しても、現場にいても分からない程度ですが、ほんの少しだけですが変化しています。このわずかな前進を続けていくしかない、ということが骨身にしみて分かりました。



ビフォー



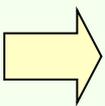
アフター

平成23年8月16日(火) 水路の掘り起こしをしました。

私の班が分担したのは、水路の掘り起こしです。活動内容が分かりやすいので、変化も見やすいと思いますが、左から右の写真のように水路がつながってきました。1日やってたったこれだけですが、確実な前進です。水路には、10人で取り組みました。埋まっていたのは土などではなく、ヘドロのようなものでした。気仙沼港のヘドロなのか、石油タンクの重油が混じったのか、とにかく臭く、重く、粘りの強い土砂でした。写真右下が黒っぽいのが分かるでしょうか。



ビフォー



アフター

被災地支援ボランティア その2

平成23年8月17日(水) 水田の瓦礫の撤去

2日目の今日は隣の水田のガレキの撤去です。ガレキといっても、とにかく何でもありました。家屋の一部、壊れた家具、家電製品、日用品、農耕具、機械類、とにかく何でも埋まっていました。中には薬品や農薬など危険物もたくさん含まれていると思われ、注意が必要です。写真右の上と下の水田を比較して下さい。下の水田のような状況だったのが、支援活動の繰り返しにより、上のようになっています。しかし、それまでは相当の回数を重ねているということです。



支援活動



撤去前

平成23年8月17日(水) 支援活動を通して

気の遠くなるような活動をしながら、様々なことを考えました。活動のためには小さくない費用が必要で、たとえばボランティアバス1台分の参加費を100万円とすると、現地に行かなくても、そのお金を被災地の方々の支援金に使ってもらった方がいいかもしれない、とか。途方もないボランティアの数と膨大な労力、人の移動のためのガソリン等を費やしても、ごく僅かな前進しかせず、もっと重機を使ってできないのだろうか、とか。それでも日本全国から連日、ボランティアが集まって来ていて……。支援の形は様々あり、どれが一番いいとか、どれが正解とかではなく、自分ができることをするしかないと思います。確かなことは、今も、これからも、それでもボランティアを必要とする人々がいるという事実です。



支援活動



片付け

8月16日・17日の写真です。震災から5ヶ月も経つというのに、全くの手付かず。大きく復旧へ向かっている場所がある一方、取り残されているところもある、というのが現状のようです。気仙沼港から500m以上の離れた市街地の真ん中に、第18共徳丸が取り残されています。あたりは倒壊した家屋も瓦礫もすっかり撤去され、何も無い荒涼とした風景の中、何か異様な感じがしました。

